

Title	はじめに：「象徴と実在の間」
Sub Title	Preface : royal bodies
Author	小菅, 隼人(Kosuge, Hayato)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2020
Jtitle	Booklet Vol.28, (2020. ) ,p.7- 9
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000028-0007">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000028-0007</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はじめに

## 「象徴と実在の間」

Royal Bodies

このBooklet 28の企画を起こした平成30(2019)年は、30年間在位した天皇が退位し、令和元年として新しい天皇が即位した年でした。昭和64(1989)年、昭和天皇が崩御した時、大学に勤め始めたばかりだった筆者は、昭和天皇の死によって天皇制が終わった、天皇裕仁は最後の天皇として記憶されるだろうと即座に思いました。しかし、その感想はやがて覆され、平成の天皇は昭和の天皇に続き、象徴天皇の役割を完璧に果たしたという印象を得ました。その集大成が、平成28(2016)年8月8日の「象徴としてのお務めについての天皇陛下のおことば」(宮内庁)です。式典や記者会見の中継はあるものの、天皇がメディアに記録する形で国民に直接的に意思を伝えるのは、歴史上、昭和天皇による「大東亜戦争終結ノ詔書」(昭和15年8月14日)、平成の天皇による「東北地方太平洋沖地震に関する天皇陛下のおことば」(平成23年3月16日)に続いて3回目です。平成の天皇は、自らの意思において、自然的身体が政治的身体になること——生身の人間が象徴になること——のひとつの形を30年間の在位中に具体的な行動によって示し、この中継によって、日本型象徴天皇制を完成させたと筆者は強く感じました。

一方、実在と象徴の二重性、そしてその両者の関係の在り方は、まさしく演劇学の基本問題です。演劇は、俳優という人間が、自分ではないもの(登場人物)になるという行為を核とした芸術形態であり、観客はそこにいるのが実在の人物ではないことを知りながら、存在しているもの(劇人物)として見るという構図を基本としているからです。これはまさしく、天皇制の構図と同じであり、平成の天皇が考え続けてきたことでもあったと推測されます。そして、このことは西洋においても、国王の身体の二重性という問題として考え続けられた問題系でもありました。本書では、エルンスト・H・カントーロヴィチの著書『王の二つの身体』(*King's Two Bodies*)がしばしば参照されますが、筆者が「序論」でも触れたように、カントーロヴィチは、中世政治神学の視点から、王権における王の身体の二重性、すなわち、王の「自然的身体」(ボディ・ナチュラル)と「政治的身体」(ボディ・ポリティック)の共存を論じています。2つの身体は、演劇の構図に当てはめれば、まさに「演技」行為によって結ばれている俳優と登場人物の重層的関係にあたります。そうだとすれば、「天皇」と国王を考えることは、演劇を考えることであり、さらに、象徴と実在の共存という視点から見れば、芸術全般の在り方を考えることにも広げることができるでしょう。

本書には、最初に小菅隼人による「象徴と実在の間——〈天皇〉の二つの身体」を取めました。この「序論」において、なぜ、「天皇」を演劇の文脈で考

察の対象とするかという問題提起をしました。続いて、日本政治外交史研究の黒沢文貴氏、日本近世近代演劇研究の神山彰氏の論考を取めることで、この問題が多角的な側面を持っていることを示しました。黒沢氏は戦間期の日本陸軍の研究において、神山氏は歌舞伎研究において、斯界の第一人者です。これに加えて、日本演劇学会での畏友、西洋古典劇研究の北野雅弘氏にギリシャ悲劇における「王」、ドイツ現代演劇研究の萩原健氏にナチスドイツ式敬礼に触れていただいたことで、演劇における身体の問題が明確になりました。そして、新進気鋭の研究者たち——熊谷知子氏、田中里奈氏、稲山玲氏——の論考によって、身体の二重性は、真山青果、宝塚歌劇、野田秀樹において論じられ、この問題における時間的、場所的広がりが示されました。

さらに本書において特筆すべき記事が、森村泰昌氏へのインタビューです。本書所収の「〈まねぶ〉方法あるいは自画像的演技論——森村泰昌に聞く」において、森村氏は次のように語っています。

自分というのがまずあって、その後で自分ではない別ものになるというとき、何になるかは基本的には問わないです、極論すればじつは何でもよかったです。今ある自分ではない別の何ものかになることが大きな目的なんです。別ものに「なる」そのプロセス、その変化、変身、変貌の実感、欲望が重要なんです。何ものかになる、その「何ものか」が主題ではなく、「なる」というその行為自体、その変化の実践の中を、なんというか泳ぐ醜態味みたいなのが重要なんです。とはいえ、変身してゆくんですから、それはいつだって「何ものか」へと向かうことなので、その「何ものか」は必ず設定しておかなければなりません。「何もの」でもない何かに変身することは不可能なんです。それで、すでにこの世にある「何ものか」を渡り歩くことになっていった。今とは異なる「私」へと変わっていくのだとすれば、いったい自分はどのような別ものになるべきか、その「何ものか」のお手本みたいなものを探さないといけなくなるんです。(本書、165頁)

変化への意志が「演じること」の本質にあることを実践家の立場から述べた証言です。その内容は、森村氏個人の場合に留まりません。演じるものの意志が、演劇の本質的起源であって、多くの俳優は、機械として喋ったり、動いたりしているのではなく、“自分が何のために演じているのか”という問題を常に意識していることが示唆されています。森村氏のこの証言は、まさに、「序論」で触れた演劇の二重性を解き明かす大きな手掛かりになるように感じています。

表紙デザインは垣本正哉氏にお願いすることができました。筆者は垣本氏に、Booklet 25「シェイクスピア——拡張する世界」の表紙デザインをお願いしたことがありますが、今回も素晴らしいデザインをいただきました。垣本氏は、アート・センターまで足を運んでくださり、今回のテーマについて長時間に渡って意見を交換して下さいました。その後も、一度出来上がった素晴らしいデザインに、さらに編集委員会の注文を入れて、手を加えてくださったのが、現在の表紙です。この表紙自体が一つの論考と言ってもよからうかと思えます。

これまでと同じく、このBooklet 28は、内藤正人所長を中心とする編集委員会での議論を経て企画されたものです。但し、実務上の不手際があれば、その責任は今号担当である小菅にあることを明記しておきます。

このBookletを編集している2020年2月に、世界的規模の新型コロナウイルス感染症の大流行が起きました。それに伴い、慶應義塾大学も卒業式が中止、入学式が延期となり、新学期の授業は4月30日からオンラインで行われることになりました。4月7日には、ついに、「改正新型インフルエンザ等対策特別措置法」に基づく緊急事態宣言が、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、大阪府、兵庫県、および福岡県に発令され、4月16日には全国に拡大されました。大学のみならず、劇場、博物館、映画館などアートに深く関係する施設も閉鎖を余儀なくされています。

しかし、アートは、不要不急なものではなく、人間にとって絶対的に必要であり、生きていく上でなくてはならないものです。いかなる逆境にあってもアートの灯を消してなりません。そのような決意でこの状況に臨んでまいりますので、日頃、アート・センターの活動にご理解をいただいている皆様に、変わらぬご支援をなにとぞお願いいたします。このBooklet 28への感想、研究・教育活動への提言をアート・センターにお寄せいただければ幸いです。

慶應義塾大学理工学部教授 アート・センター所員 小菅隼人